

# 高知市ゆかりの人々

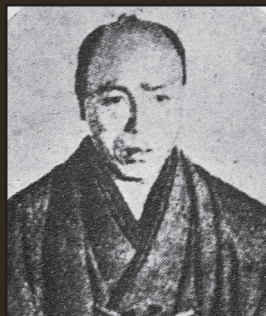


05

やまうち  
**山内**  
とよしげ  
**豊信**

土佐15代藩主・1827～1872年

吉田東洋を抜擢し、「安政改革」を進めた。將軍の跡継ぎ問題では大老・井伊直弼と対立して隠居謹慎となる。隠居後は「容堂」と名乗り、謹慎が解かれた後は、隠居の身でありながら藩政に関わった。後藤象二郎の進言を受け、15代將軍・慶喜に大政奉還を建白。



03

よしだ  
**吉田**  
とうよう  
**東洋**

幕末の土佐藩重職・1815～1862年

私塾「少林塾」を開き、後藤象二郎・板垣退助・岩崎弥太郎らを指導。山内容堂に抜擢され、「安政改革」を行う。公武合体の立場であったが、城中より帰宅の途中に土佐勤王党の黨員の手にかかり、暗殺される。



01

けんしょういん  
**見性院**

山内一豊の妻・1557～1617年

名前は千代またはまつと伝えられるが定かではない。一豊のために10両の金を出して駿馬を買った逸話や、まな板代わりに枡を裏返して使い節約した話など、「内助の功」で夫を支えた賢婦の鏡として知られる。



06

たけち  
**武市**  
ずいざん  
**瑞山**

土佐勤王党盟主・1829～1865年

土佐藩同志による土佐勤王党を結成。藩の体制を刷新するため、勤王黨員の手による吉田東洋暗殺を実行。しかし、前藩主・山内容堂の土佐勤王党の弾圧により、瑞山も投獄された。龍馬が龜山社中を結成した慶応元(1865)年、獄中で切腹。

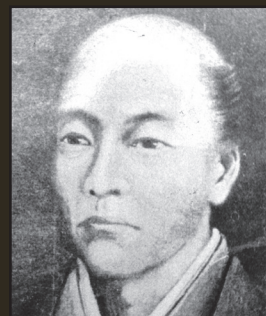


04

かわだ  
**河田**  
しょうりょう  
**小龍**

画家・1824～1898年

漂流より帰郷したジョン万次郎(中浜万次郎)の取り調べに当たり、「漂異紀略」を著す。坂本龍馬に海運と海防の構想を説き、大きな影響を与えた。また、画塾「墨雲洞」を開き、龜山社中・海援隊に参加する近藤長次郎、新宮馬之助、長岡謙吉らを育てた。



02

のなか  
**野中**  
けんざん  
**兼山**

政治家・1615～1663年

奉行職としておよそ30年間、藩の政治を任される。学問を盛んにし、多くの学者を育てる一方、土佐各地に用水路を造り、3,000町歩の新田開発を行った。彼の造った用水路、港などは現在でも使われているものが多い。

参考文献：『高知県人名事典 新版』(『高知県人名事典 新版』刊行委員会編集、高知新聞社発行、2000年)

## 坂本龍馬語録

幕末の動乱の中、大胆な発想と行動力で時代を切り開いた坂本龍馬。そんな彼の生きざまを感じる事ができる名言をほんの少しだけご紹介。

其ノ巻

世の人は  
われを何とも言わば言へ  
わが成すことは  
我のみぞ知る

これは龍馬が神戸にいた時期に詠んだ歌と考えられる。通常、脱藩した志士は、反幕府方として活動する人が多かったが、龍馬は幕臣の勝海舟の弟子となった。周りの人から理解を得られないが、自分の信念を貫く気持ちを詠んだ歌。(出典…詠草二和歌)

其ノ巻

君がため  
捨つる命は惜しまねど  
心にかかる国の行く末

龍馬は文久3(1863)年に勝海舟に頼まれ、神戸海軍塾開業資金を福井藩に借りに行く。そこで由利公正や熊本、横井小楠と出会い、詠んだ歌。好きな人のために命を捨てることは惜しまないが、心に国の行く末が引つかかっている。国のこと





11  
植木  
枝盛

自由民権家・1857～1892年

「東洋大日本国々憲案」起草。彼の記した基本的人権の思想は、現行の日本国憲法に重要な影響を与えた。また「立志社建白」など、多くの重要文章を起草し、常に自由民権運動の中核で活躍。「民権自由論」などの著書のほか、新聞論説多数。



09  
後藤  
象二郎

政治家・1838～1897年

大監察として土佐勤王党盟主・武市瑞山らを弾圧。その後、坂本龍馬の提案である船中八策に基づき、山内容堂による将軍・徳川慶喜への大政奉還を進言する。維新後は板垣退助の自由党結党に参加し、逓信大臣、農商務大臣を務めるなど活躍した。



07  
坂本  
龍馬

幕末の志士・1835～1867年

土佐勤王党に参加。その後脱藩し、亀山社中の設立や薩長同盟の斡旋、大政奉還の推進、船中八策の提唱など歴史的偉業の達成に尽力した。京都近江屋で土佐の盟友・中岡慎太郎とともに襲撃され、明治維新を見届けることなく33歳の若さで闘死。



12  
寺田  
寅彦

地球物理学者・1878～1935年

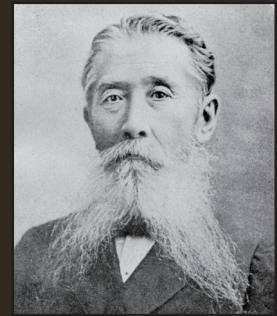
「天災は忘れられたる頃来る」とは彼の言葉。日常身の諸現象を分析して、何らかの法則性を発見しようとするところに寅彦の物理学の特徴がある。随筆や俳句も手掛け、その他にも油絵、水彩画、バイオリンなど多芸多能であった。



10  
中江  
兆民

思想家・1847～1901年

フランスに留学し、帰国後、仏学塾を開く。西園寺公望らと「東洋自由新聞」を創刊。自由民権運動の代表的思想家の一人であり、ルソーの「民約論」を翻訳したことなどから、「東洋のルソー」と呼ばれた。



08  
板垣  
退助

政治家・1837～1919年

立志社を創設し、国会開設をめざして、自由民権運動を全国に広め、自由党の総理として活躍した。彼の「板垣死すとも自由は死せず」という言葉は、自由の尊さを表したものとして有名。明治31(1898)年に内務大臣になる。晩年は社会改良運動を進めた。

写真提供：土佐内家宝物資料館（見性院・山内豊信）、高知県立歴史民俗資料館（野中兼山・吉田東洋・河田小龍・武市瑞山・坂本龍馬・後藤象二郎）、高知市立自由民権記念館（板垣退助・中江兆民・植木枝盛）、高知県立文学館（寺田寅彦）

を考えると、あなたのために死ぬことはできないという歌ではないかと考える。（出典…文久3年5月16日、三岡八郎居宅で謡ったとされる。「子爵由利公正伝」より）

其ノ参

国のため  
天下のため  
力を尽くしおり申候

龍馬が脱藩後に書いた最初の手紙。文久2(1862)年暮れ頃に勝海舟に会い、弟子入りした。「今は勝海舟という日本第一の人物の弟子になって、日本のために精一杯働いています。これからは国のため、天下のために力を尽くそうと思っております」という決意を語った手紙。非常に前途洋々の時期に書いた手紙なので、力強さが出ている。（出典…文久3年3月20日坂本乙女あて書簡）

其ノ四

日本を今一度  
せんたくいたし申候

神戸海軍塾に入っている時期。長州藩が下関で外国と戦争をした際、幕府は戦争で傷ついた外国船を修理していた。龍馬はそれを知り、幕府の役人に激怒した。同じ日本人である長州の味方をせず、外国の味方をすると何事だ。そんな腐りきった役人を一時に撃ち殺して日本を洗濯したい、という過激な決意を語った手紙。（出典…文久3年6月29日坂本乙女あて書簡）